



千年村チェックリスト Ver.2.3

千年村チェックリストは、環境・地域経営・交通・集落構造の観点から、自ら住む地域についての自己評価を行うことができます。それぞれの項目や、最終ページの自己評価方法までの一連のフローは、2012年より正式に活動した千年村プロジェクトの実地調査による知見を反映したものです。今後、このチェックリストを利用した千年村認証活動も行う予定です。

※チェックリスト記入マニュアルや、過去の事例を参考に記入して下さい。

※記入の際は、個人だけでなく複数人で相談することを推奨します。

※提出の際には必ず自治会長など集落を取り仕切る方の確認を取ってください。

※固有名詞などはできるだけ具体的に記入してください。

※出典は必ず明記して下さい。

※用途以外での千年村チェックリストの無断使用・無断転載は禁止します。

2017.03.31 千年村プロジェクト

以下、記入欄

○記入者情報

代表者（自治会長など）

氏名：^{ふりがな} 小峰 邦明

肩書：^{ふりがな} 岸自治会長

連絡先住所：東京都武蔵村山市 中原 2-6-2

連絡先：^{ふりがな} 出雲 隆盛

代表記入者 氏名：^{ふりがな} 出雲 隆盛 所属：公園ボウタイア 連絡先：042-396-0884

記入者2 氏名：^{ふりがな} 原 田 拓 夫 所属：岸 田んぼ 会々長

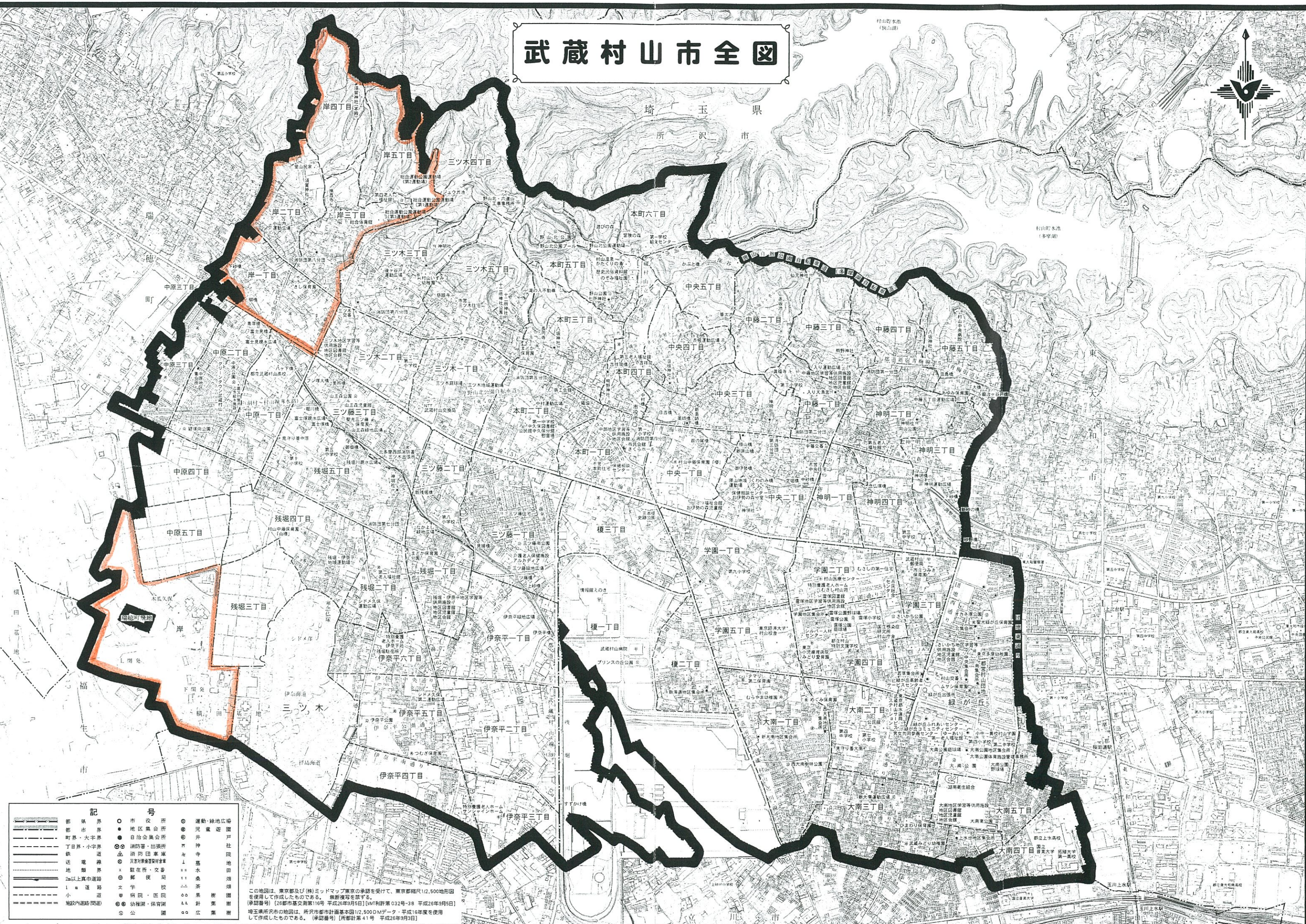
記入者3 氏名：^{ふりがな} 宮崎 正 所属：武蔵村山市議会議員

記入者4 氏名：^{ふりがな} 原 田 英 治 所属：武蔵村山文化財保護審議会

0 集落の概要

集落の名称	現在の地名（大字） かな き し 岸	歴史的地名（参照した古文書の名称とその成立年代） かな
所在地	大字まで書いて下さい。 かな どうきょうと むさしむらやまし きし 東京都武蔵村山市岸	
面積	(30年度) 90.28 ha =km ²	人口 2,828人
	(30年度) 世帯数 1,265 世帯	
合併の歴史	年月日、地域の名称の変化など、分かる範囲で書いて下さい。 1917(大正6年) 旧岸村、三ツ木村、中蔵村が合併して「武蔵村山」となる。 1954(昭和29年) 所制が施行され「村山町」となる。 1970(昭和45年) 村山町が市制を施行し「武蔵村山市」となる。	
地域の記録	○○村史、○○市史など地域の記録はあるか（対象大字より広範囲のものでも可）。その発行年・著者。 武蔵村山市史 通史編(上)(下) 平成15年 武蔵村山市発行 武蔵村山の民俗 平成8年 綾岡と号集で見る武蔵村山 平成29年 武蔵村山市教育委員会	

武蔵村山市全図



- | 記号 | |
|----|---------|
| —— | 市界 |
| —— | 町界・大字界 |
| —— | 丁目界・小字界 |
| —— | 鉄道 |
| —— | 道路 |
| —— | 2m以上真市道 |
| —— | 小 |
| —— | 地蔵(道路) |
| ○ | 市役所 |
| ● | 地区集会所 |
| ● | 自治会集会所 |
| ● | 消防署・出張所 |
| △ | 消防団車庫 |
| × | 駐在所・交番 |
| × | 郵便局 |
| × | 学校 |
| × | 病院・医院 |
| × | 幼稚園・保育園 |
| × | 公園 |
| ○ | 運動・緑地広場 |
| ○ | 児童遊園 |
| ○ | 神社 |
| ○ | 寺院 |
| ○ | 水 |
| ○ | 井 |
| ○ | 茶 |
| ○ | 果 |
| ○ | 菜 |
| ○ | 樹 |
| ○ | 針 |
| ○ | 広 |
| ○ | 葉 |
- この地図は、東京都及び(株)ミッドマップ東京の承認を受けて、東京都縮尺1/2,500地形図を使用して作成したものである。無断複写を禁ず。
(承認番号) [26都市基交測第116号 平成26年9月5日] [MUT利許第032号-38 平成26年9月5日]
埼玉県所沢市の地図は、所沢市都市計画基本図1/2,500DMデータ・平成16年度を使用して作成したものである。(承認番号) [所計第41号 平成26年9月3日]

※この自治会区域は目安です。

I 環境 —自然とのつきあい方—		
番号	ポイント	
①	集落のかたち・立地 古いところ	例) 古い集落はどんな地形に立地しているか。どこの水系に属しているか。また、街道やみなどとの関係はどうか。旧河道はどこを通過しているか。 狭山丘陵の南麓に昔から人家が集まり集落を形成している。残堀川が東南に流れる多摩川水系に属する。集落の中央に青梅街道が東西に走り南に多摩川と合流している飛び地が存在する。
②	生産地(農地や工場など)の立地	例) 農地、工場、商業地、漁業、林業などはどこに立地しているか。圃場整備の範囲はどこか。工場、商業地がいつできたか。耕作放棄地や空地がどこにあるか。旧河道はどう利用されているか。 工場や大規模商業施設はない。自宅近くの畑で自給自足的な野菜栽培をしていて、軒先で無人販売をしている農家がある。都立公園内の谷戸田ではボランティア中心に米作りをしている。
③	主要産業・特産物	例) 現在の主要産業は何か。働き先はどこか(集落内外)。かつての主要産業は何か。特産物はあるか。 現在中心になるような産業はない。戦前は村山大島紬の生産に従事する家が多かった。また一部で米は取れたものの大半は麦、羊を耕作していた。戦後舞臺のシメには今でもうんがみ出でくる文化がある。昭和30年代までは中を飼う農家も多かったが今は一軒も残っていない。
④	水源と水の引き方	例) 農業用水の水源は何か。生活用水の水源は何か。井戸が残っているか。地域内の水路はどこを通過しているか。 谷戸から湧き出る水を利用して米を作った。生活用水は昔は井戸だったが今は水道水である。昔の家には井戸が残っているが災害用の井戸として指定されている。北に人造湖の山口貯水池(狭山湖)があるが、地元には向かい意識もない。
⑤	近年の土地開発について	例) 昭和40～60年代、平成、最近5年程度に行われた開発はそれぞれどこか。開発前の土地利用は何か。開発によって商業、交通などどんな変化が起きたか。 街の東北部に平成15年に武蔵村山総合体育館がオープンした。青梅街道より南は宅地化が進んでいるが、山際の集落には大きな変化はない。
⑥	過去の災害とその対策	例) 災害危険区域はどこか(ハザードマップなど)。過去、どのような災害があって、どこに逃げたか、その協力体制。どのような災害を心配しているか。集落内の安全な場所と危険な場所。 特に大きな自然災害には見まわっていない。また過去にもどのような記録はない。大火に見まわった記録は残っている。公園、広場、集会場等が避難場所として指定されている。
⑦	その他	自由記述・図示など。 土地開発について、昔には多摩川と合流する飛び地が存在する。狭山丘陵南麓にある集落がほとんどそうであるように街の形が徒に細長い。これは古くから存在していた山際の集落が江戸時代以降、南へ南へと南進していったからである。 また多摩川は米田横田基地内にもある。よって周辺は人家や建物が建てられなくすべし畑である。

II 地域経営 一集落を支える仕組み一

番号	ポイント	
①	各種組織	例) 行政区、町内、班といった地域的な組織の構成および目的別の組織（消防団、氏子、講など）にはどのようなものがあるか。可能な限り連絡先を記入して下さい。 岸自治会、消防団、グラブゴルフ会、PTA会、長寿会、傾賢神社、阿豆佐味天神社の氏子、祥昌寺、福正寺の檀家、稲荷講、岸たんぼ会、岸まや王保存会がある。また昔は冠婚葬祭用の膳櫃を共有する地域の組合的なつばがりがあったが、今は消滅している。
②	地域内での情報伝達、連絡の方法	例) 地域内での情報の共有や連絡はどのように行われているか。（回覧板・ウェブサイト（URL）・公民館便りなど） 市報や町内会の回覧板がある。昔は「いいたえ」という口頭伝達があった。
③	山林、里山また湖などの管理主体	例) 地域に共有性のある土地利用（入会地など）が行われているところはあるか。その利用主体の組織はどのようにになっているか。 ヤマの多くは江戸時代は入会地であった。今は各戸田を含むヤマのほとんどが都立公園となり、都が所有し、実際の管理は都が指定した公園指定管理者が行っている。
④	水の管理主体	例) 水門、水路などの水利用施設の維持管理を行う組合、組織はあるか。農業用水以外の水利用に関わる組織はあるか。 谷戸の奥に池田と呼ばれる堰があり、田んぼの水をためていたが、今は土砂で埋まり機能していない。公園内の田んぼの水は岸たんぼ会によって管理されている。横丁川は水量が安定せず、農業用には利用できず、よって管理する組織もない。
⑤	地域祭礼・年中行事	例) 祭礼についてその概要や成立時期、祭礼と地域住民の関わりはどうなっているか。また地区対抗運動会など地域が参加する年中行事はあるか。 傾賢神社の例大祭が毎年7月にあり、奥の院まで神輿を運ぶに行く行事が今でも残っている。数年前から瑞穂町箱根ヶ崎、石田、殿ヶ谷と岸の御祭が同じ阿豆佐味天神社の前で執り行うようになった。
⑥	地域の歴史・物語の伝承	例) 地域の歴史や物語などを伝える活動、組織（郷土史会、歴史遺構の広報活動など）はあるか。可能な限り連絡先を記入して下さい。出版物には出版年・著者などを記入してください。 武蔵村山市郷土の会（会長・石川伊三郎氏） 武蔵村山の昔かたり 武蔵村山市教育委員会発行 武蔵村山の民俗 その1 平成8年武蔵村山市発行
⑦	口伝・通称の地名	例) 住所表示や地図には存在しないが地域で共有されている場所（山、集落、田、川など）の呼称、通称地名はあるか。（フリガナをつける） 岸は三つに分かれていた。 ・ヤマギワガタ ……丘陵南西部の山際方 } 現在自治会では機能していない。 ・ギシガタ ……祥昌寺から東に開けた岸方 ・ダイガタ ……青柳街道に近い方
⑧	その他	自由記述・図示など。 家号が残っている（平成19年に岸自治会が作成した屋号まががある）

Ⅲ 交通 一人とモノの往来

番号	ポイント	
①	昔からの道	例) 古くからある道で名称、種別、用途、起源などがわかるものはあるか。また、どこにつながっていたか、主に何を運んでいたか。 青梅街道とその南にある江戸街道は、江戸時代に青梅の成木で取れた良質の石灰を江戸へ運ぶ主要道であった。現在でも隣の三木地区には「宿(しゆく)」本町には「馬場(ばんば)」という小字名が残っている。
②	現在の主要な道路	例) 現在の生活の中で主に使われている道はどれか。その名称、完成時期などとそれぞれの利用方法(〇〇へ行く道、集落内移動、さんぽなど) 生活道路としては青梅街道の宿から総合体育館に行く道路がある。主要な幹線道が東西に走り、南北に小規模な生活道路が走っている。集落内の小さな道はわかりづらい。
③	建設予定の道路の有無	例) 地域に影響がありそうな道路の新規建設計画、拡幅などの改良計画はあるか。その名称、完成予定時期、目的、また集落の存続に与える影響など。 2017年に岸3丁目の「市道17号線」が整備拡張された。コミュニティバスを乗り入れてほしい要望があるが、バスの折返し点がないなどの理由で実現していない。
④	水運の有無と利用法	例) かつて使われていた水上交通(川、堀、河岸、港など)はあるか。それらは、どのように使われていたか。今はどうか。 街の南を流れる残堀川は少し広い小川で舟を浮かべた記録はない。また現在護岸はコンクリートにより固められており水上交通とは無縁の地である。
⑤	鉄道の有無、その経緯と現状	例) 地域に関わりのある鉄道はあるか。廃線になったものも含めて、その路線、駅、主な用途、時代的な変化などはどうか。 1927年(昭和2年)山口貯水地(狭山湖)完成のために、羽村ー山口間に軽便鉄道が通り羽堀川の治水を運んだ。岸の飛田地内を通っていたが完成後にはなくなり、その後片を見ることができない。
⑥	その他	自由記述・図示など。 武蔵村山市は東京都において島はを除いて唯一鉄道が通っていない、従って駅はありません。鉄道路線がない代わりにバス便が他地域より発達しており、市町村が主体となって運営するコミュニティバスはこの地が先駆けで全国に広がったと言われています。 立川ー上北台(東大和市)間に多摩都市モノレールが運行されており、その延伸を市と市民が望んでいます。実現すると初めての駅が出来る予定です。 昭和の初めに出来た上記の軽便鉄道はその役目を終えると廃線となり、現在はトンネルを含めて自転車道として整備され市民の憩いの場所、観光名所の役目をしていきます。

IV 集落構造 ー集落の骨格ー

番号	ポイント	
①	集落の核	例) 古いと言われている場所、集落の起源とされている場所はどこか。皆が中心だと思う地区、寺社、本家などは、どれでどこにあるか。 岸と瑞穂町殿ヶ谷の境に延喜式神社である阿豆佐味天神社が鎮座し氏子も多数いる。集落の中心となるのは小山内運動広場(旧十王堂)と須賀神社である。
②	墓地の場所と現状	例) かつての埋葬地はどこか。墓地はどこか。その成立時期、管理方法(一族的管理、宗教施設による管理など)に特徴があるか。 禅昌寺の裏山に禅昌寺が管理する墓地がある。岸は禅昌寺と殿ヶ谷の福正寺の檀家に分かれていた。昔は死者が出ると「アナホリ」という習俗があり、絶対に避けて通れない地域の組合的なつなぎ合いがあったが、今はない。
③	集落の維持について	例) 道、石積み、建物などの建設に携わる専門職はいるか。在来工務店はあるか。地場的な素材利用はしているか。 在来の小さな工務店がある。目立つた高い建物はなく、低層住宅が多い。
④	文化・自然遺産の有無	例) 遺跡や旧跡、古民家、古さを示す自然物(御神木など)、古くからある土木構造物はあるか。その年代はいつか。 ○ 神社公園内には高田の殿様と呼ばれる江戸時代の石仏がある。 ○ 横又保古子からは庚申塔が見え、禅昌寺の所有物だが寺の歴史民俗資料館で展示されている。 ○ 石橋庚申塔や馬頭観音の石碑が街中にあり、一部は市指定の文化財と(なっている)。
⑤	集落の型	例) 集落のかたち。地形や水路との関係はどんなふうか。集落内の民家、敷地に共通点はあるか。〇〇造り等の名称はあるか。(可能であれば図示) 標山丘陵の麓には昔からの旧家があり、くすの木や多羅葉の犬木があったり、屋根に懸魚のある家がある。また自宅敷地内に稲荷を祀った屋敷神の小さな祠のある家が多くある。
⑥	暮らしの工夫 村での発明	例) 集落における面白いモノの利用(独特な軒下の形、水場の使い方など)、そのための小さな発明。修繕のしかたなど。 特に該当するものは見当たらない。
⑦	その他	自由記述・図示など。 岸では昔、冠婚葬祭は自宅で行っていたため、共同で使用する膳櫓があり、それを組める枕蔵があり、地域の助け合いや組合的なものとして機能していたが、今はセニールホールでやろうとばかり、消滅してしまった。 本家と合家も合せて一家と呼んだり、親類にも普段つぎあいのない屋敷親類がいたり、新類(新)と地類と呼ばれる近所つぎあひもあった。

自己評価

これまでのチェックリストを振り返り、環境・集落構造・地域経営・交通の各要素について以下の3段階評価を行ってください。
そして、その理由を記述して下さい。また、自己評価をもとに、集落についての総合評価を行ってください。

○自己評価：A・・・優れている B・・・やや優れている W・・・弱い

要素	自己評価	理由
環境	A	北に狭山丘陵、南に新青梅街道に挟まれた縦に細長い街で、昔の佇まいが残る街並みと丘陵の豊かな自然が残っている地域である。都立公園のボランティアや地元の団体により生物多様性が維持され、地域の文化や里山の風景が再現されている。
地域経営	A	昔は地域の繋がりで膳椀を共有する組合的な組織があったが、今はない。しかし住民は阿豆佐味天神社、須賀神社の祭礼や稲荷講などで強い結びつきがある。都立公園ができボランティアが活動するようになってから意識が変わってきたように思える。今でも血縁、地縁の結束は固い。
交通	W	新青梅街道、青梅街道の幹線道路が東西に走っている。しかし街中や公園へのアクセスが不便で分かりづらい。鉄道がないので自家用車、都営・民営バス、コミュニティバス利用が中心となっている。市民は多摩都市モノレールの延伸を希望している。
集落構造	B	狭山丘陵の麓には静かな佇まいの集落が多く存在している。昔から岸は岸方、山際方、台方の3つに分かれていたが、現在は機能していない。山際には古くからの旧家が多く、分家や新しい家は南に向かって広がり新青梅街道より南にグリーントウンと呼ばれる住宅団地が広がっている。

総合評価

自己評価をもとに、この集落がなぜ千年村であるか、どのような点で千年村として優れているのかなど、自由に記入して下さい。
また、それらが千年村認証基準のどの項目を満たしているか記入して下さい。

和名類聚抄にはこの地域は石津郷として出てくるが、比定はできない。延喜式の阿豆佐味天神社や須賀神社、禅昌寺があり、公園内の谷戸では古くから米作りが行われていた。ヤマが都立公園に指定されたことでボランティアが組織され、ゴミ捨て場だった谷戸田で地元の岸田んぼ会の皆さんとボランティアで米作りが始まり、昔の里山風景が戻ってきた。生き物の多様性も復活し、明るい雑木林も戻ってきた。何より人が戻ってきてその繋がりが広がっていることが大きい。さらに千年村を契機にボランティアと岸の人たちが一体となって街づくりをしようとしているところに、岸の千年村としての価値がある。

昔の里山風景を復活させたこと、さらにボランティアと岸の人たちとの新しい関係ができつつある地域経営を評価したい。

キャッチフレーズ

集落のキャッチフレーズづくりに挑戦してみましょう。これまでの記述を踏まえて、この集落の持続要因を一言で表してみてください。

緑と人、人と人、歴史と文化がつながる街

岸の街中の様子



山際の民家



運動広場(旧十王堂)



地元の肉やさん



岸の南を流れる残堀川



青梅街道（里山民家入り口付近）



多磨開墾(奥は米軍横田基地)

岸の民俗



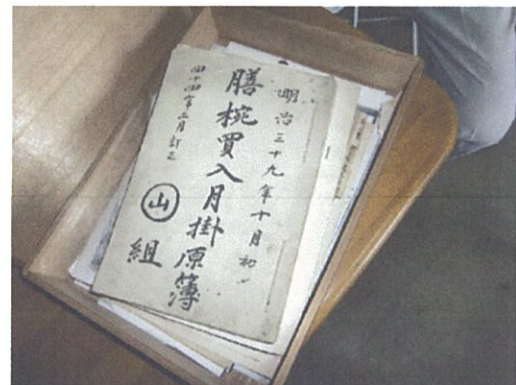
奥の院に向かう隊列（里山民家前）



ボランティアによる山の神



山車（須賀神社の例大祭）



膳枕購入記録帳（昔の地域相互扶助）



稲荷講



公園内にある江戸時代の石仏

公園内でのボランティア活動



まゆ玉飾り



手もみ茶



収穫祭での餅つき



藍染め



茶摘み



伝統食・かてうどん作り

公園内にある岸田んぼ



田植え



案山子づくり



古代米



冬の岸田んぼ



稲架掛け



里山民家(活動拠点)



これは神社…? いいえ、れっきとした駅です! この立派な瓦ぶきの赤い駅は新潟県弥彦村にある「弥彦駅」=写真。越後国一宮・弥彦神社の参詣路線として1916(大正5)年に開業し、現在はJR弥彦線の起点です。駅舎は弥彦神社の本殿を模した木造寺社造りで、入り口のそばには手水舎まであって本格的! 2013年に改装されたので新しく見えますが、建設された当時の姿をほぼ残しているそうです。

改札口が鳥居かな



屋根の鬼瓦をよく見ると、かわいらしい白兔が彫り込まれています。これは村に伝わる「兔伝説」が基になっていて、近くの弥彦温泉街では兔をモチーフにしたお菓子の土産もたくさん売られています。

駅から歩いて15分ほどの所には、モデルになった弥彦神社があります。ご神体として祭る弥彦山のふもとに鎮座し、県内屈指のパワースポットとして人気。地元では「おやひこさま」として親しまれ、万葉集にも詠まれています。

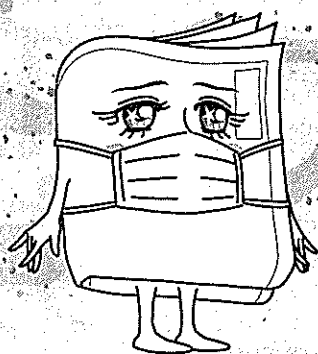
訪れたのは2月でしたが、春は駅近くの弥彦公園の桜が見事なんだそうです。広大な公園に早咲き、遅咲きの桜が咲き乱れ、長く楽しむことができるみたいです。弥彦線に乗って、ぜひお出かけしてみてもいいですね。



村井美樹さん

むらい・みき 1979年京都市生まれ。女優業を中心に、クイズ番組「Qさま!!」(テレビ朝日)、鉄道旅番組などで活躍中。

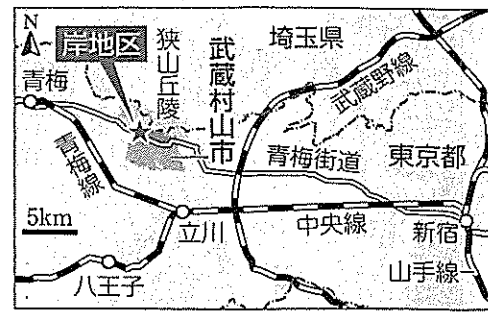
次は 古今亭駒治さん



2
(1990)年

「鉄学しましょ」は東京新聞ホームページにも掲載。ツイッター「東京新聞鉄道クラブ」では本紙記者が鉄道の話題をつぶやいています。
*「運勢」は26面に掲載

鉄学



ここは多摩北部、埼玉県所沢市に接する武蔵村山市の岸地区だ。同市は都内で唯一、鉄道駅がない市で知られる。岸地区は市西端の丘陵の裾野に位置し、同地区を含む都立野山北・六道山公園のボランティア、出雲隆盛さん(左)がプロジェクトを知って認証の可能性を探り始めた。出雲さんは滋賀県出身で東村山市在住だが、「ここはきつと千年

村」。災害や時代の変化の波を乗り越え、脈々と営みを紡いできた集落を探そうと、建築や環境の研究者たちが取り組んでいる。そんな「千年村プロジェクト」に、都内から初めて名乗り上がった。めまぐるしく変貌する東京に、千年続く村は本当にあるのか。現地を訪ねた。

「プロジェクト」初名乗り

東京にもあるぞ 千年村

都立野山北・六道山公園に復活した水田と、その周囲に広がる里山の風景＝いずれも武蔵村山市で



岸地区の神社で住民から話を聞く「千年村プロジェクト」の木下剛共同代表(左)。木下さんの隣は公園ボランティアの出雲隆盛さん

村でしょう。よそから来た人の方が、よさがわかるんです」と語る。

千年村プロジェクトは東日本大震災を機に、早稲田大学の中谷礼仁教授(歴史工学)らが始めた。どんな地域が災害に強く、持続力があるのか

かつての自然戻る

「高度成長期に日産の工場が近くにでき、みんな田んぼをやめて働きに出た。土地ブームが起き、この辺りは産廃置き場になって、黒々としたごみが山のようにあった」。野山北・六道山公園に水田を復活



野山北・六道山公園内には江戸時代の墓地や石仏も残る

認定年	地名
2013	島野(千葉県市原市島野)
15	山名(群馬県高崎市山名町)
	蕪塚(群馬県伊勢崎市蕪塚町)
	小川島(群馬県みなかみ町下津小川島)
16	五料(群馬県安中市松井田町五料)
	一ノ宮(群馬県富岡市一ノ宮)
	神保(群馬県高崎市吉井町神保)
17	麻生(茨城県行方市麻生)
	山田井(三重県津市大里睦合町山田井)

千年村
これまでに認証された

活させた「岸田んぼの会」の原田拓夫会長(左)が語る。二十年かけ、公園ボランティアの協力もあり、適度に人の手が入った雑木林に水田、湿地が入り交じった多様な自然が戻ってきた。

地域興しつながる

岸地区は経済に翻弄されながらも、交通が不便だったこともあって、昔ながらのものが残った。もちろん、なくなっただけのものもある。草屋根の民家は姿を消し、高台からは米軍横田基地を飛び立つ輸送機オスプレイが見える。多摩モノレールの延伸計画もある。それでも住民たちは「千年村」って言葉は初めて聞いたけれど、地域興しにつながるとい

いねえ」と期待する。認証に当たっては環境、地域経営、集落構造などさまざまな点から評価を受ける。「どこにでもあるような『田舎』のすばらしさを発見することがテーマ」と中谷教授。「今ある新しい住宅などを否定するのではない。その地域や集落の歩みを評価したい」

文・吉田薫
写真・吉田薫、戸上航一
紙面構成・安藤秀樹

fax 03-3595-6920 email t-hatsu@tokyo-np.co.jp



武蔵村山市岸地区の千年村認証にあたっての歴史的背景

野山北・六道山公園ボランティア 出雲隆盛

狭山丘陵南麓一帯は古くから人が住み、生産と生活の場があったことがわかっています。当該地区は平安時代中期に編纂された『和名類聚抄』ではその郷名を比定することが出来ません。よって野山北・六道山公園のある「岸」を千年村に推奨、認証するためにその歴史的背景を調べてみました。

地域の名称

「岸」の地名は諸説ありますが、狭山丘陵の中腹から人が住まない茅原の武蔵野台地が海に見え、丘陵麓の地形が岸のように見えたから「岸」になったという説が一般的です。他には古多摩川の名残である残堀川がこの付近を流れその岸であったという説や、百済系渡来人多磨郡「鴨の里」に住んでいた吉志火麻呂(きしのひまろ)の「吉志」が「岸」に転化したという説もあります。本来「吉志」は渡来系の集団につけられた呼称であり、それが地名に転化したと言われています。近くには延喜式神社である阿豆佐味天神社や、岸清山禅昌寺と号する古い寺院があり狭山三十三観音霊場の二十四番札所でもあります。中世は武蔵七党の一派村山党がこの地域を支配し村山郷と呼ばれ、市名の謂れとなっています。村山郷は一般には瑞穂町箱根ヶ崎から東村山市久米川までの狭山丘陵南麓に開けた生活圏を共にする地域のことを言いますが、狭義では瑞穂町箱根ヶ崎、石畑、殿ヶ谷そして岸を指しています。

遺跡からの出土品

またこの地域は武蔵国分寺（国分寺市）から遠くなく武蔵村山市中藤・赤堀遺跡では武蔵国分寺跡で発掘された布目瓦片と同様のものが出土しています。また狭山丘陵の麓にある後ヶ谷戸遺跡や吉祥山遺跡では石器や土器が出土し住居址も見つかっています。さらに後ヶ谷戸遺跡で採取された花粉やプラントオパール分析から、中世にはこの地域の谷戸で水田耕作が行われていたことが分かっています。「岸」は古くから存在し生産の場があったことが伺われます。

『日本霊異記』 弘仁年間（810年～824年）

平安時代初期に書かれ伝承された説話集。

武蔵国多磨郡にある寺院(名称不詳)は、多磨郡大領(律令制の職名で軍司における最高の地位)の相伴赤麻呂という人物が建立したことになっています。この人物は百済系渡来人の子孫といわれ「鴨の里」に住んでいたといわれています(※1) また武蔵国多磨郡鴨の里には相伴赤麻呂の傭兵であった同じく渡来系の吉志火麻呂(きしのひまろ)が住んでいたとされています。(※2) しかし「鴨の里」がどこにあったのかは比定することが出来ません。

当時武蔵国高麗郡高麗郷と呼ばれていた埼玉県日高市には、唐と新羅連合軍に滅ぼされた高句麗から亡命した渡来人が帰化し大陸文化を日本に伝えています。地元には高麗神社があります。全くの推測ですが多くの渡来人が相模から武蔵に移動し多摩川を遡り現在の狛江市を通り中流付近から多摩川を離れ北へ進路をとり、狭山丘陵の西を通過し飯能や高麗郷へ行ったものと思われます。吉志火麻呂もそのような人物の一人であったように思われます。

※1 日本霊異記の原像・平野邦雄・東京女子大学古代史研究会 角川書店 1991 年発行・61 ページ

※2 民衆の古代史・日本霊異記に見るもう一つの古代 吉田一彦(名古屋市立大学) 風媒社・124 ページ

『和名類聚抄』 承平年間（931 年～938 年）

平安時代中期に作られた郷名を比定できる漢和辞書。

和名類聚抄には多摩郡石津郷という郷名が出てきます。石津郷は多摩川流域の津を中心に発展した郷名であると考えられます。現在の日野市石田という説と、狭山丘陵に入り組んだ谷戸が入江に見えたという説から、現在の武蔵村山市近辺が該当するといわれていますが比定することは出来ません。近辺で郷名が比定できた地域に多摩郡小川郷があり現在の多摩川・平井川・秋川の三川が合流する秋川市小川町付近一帯と推定されます。当地はそこから 8～10 キロ程北東にあり人の往来は十分に可能であったと思われます。古代の行政区画は明確な区分けがなく開発の手が及ばない、人が住まない等どこにも属さない地域が当時の武蔵国には多くあり、現在の武蔵村山市もそのような地域であったと思われます。

『延喜式・阿豆佐味天神社』

行政上は瑞穂町殿ヶ谷になりますが、街境に阿豆佐味天神社が有ります。昔は殿ヶ谷とは行政上の区分けがなく生活を共にする同一文化圏でした。神社は延喜式神社で格式が高く、当時の地域行政や民衆を宗教的な側面からも取り纏めていました。その名前の意味は丘陵から湧き出る湧水を祀ったことに由来するとされています。生活に必要な水が得られ、小規模ながら生活の糧となるコメが取れたからです。公園のある宮野入は当時は神田(かんだ・神の田)となり古代米を作っていました。しかし明治政府の古いものを失くす政策で古代米は一般には栽培できなくなり、神社の神田の一部でしか残りませんでした。公園のある宮野入は文字通り神の田のあるお宮の谷戸と考えられます。公園では毎年ボランティアが地元岸田んぼ会の指導のもと古代米も栽培しています。

『岸村絵図』(添付 1)(添付 2)

寛政 4 年（1792 年）に代官に提出した岸村絵図が残っています。村絵図は幕府や各地の領主が支配する村々の様子を把握するため、例えば入会地や村境の争い時や、新田開発、年貢の徴収など様々な目的で絵図が描かれました。岸村には当時の名主であった荒田家に保存されています。

当時の絵図には珍しく上が北になっています。河川、畑、道、田、山林が用途別に色分けされ見やすくなっています。人家の位置や並びもわかります。谷戸には水田が広がり、丘陵の麓に集落が集まり南に畑が開けています。また丘陵の奥は入会地だったことが分かります。神社、寺院、通り、河川名も記載されています。谷戸名やせり出した峰の名前は現在の名称と変わっていないことも分かります。現在都立公園がある宮野入は当時からすでに田圃だったことがわかります。

この絵図が出来る以前の享保 11 年（1726 年）には岸・石畑・殿ヶ谷 3 村と三ツ木村の間で入会秣場を巡る紛争や、助郷負担をめぐる紛争が起きています。これらの争いは宮野入の奥は昔から池田と呼ばれていてその周辺や、現在の三本入、赤坂、エヶ入り奥のヤマがその紛争の舞台であったと思われます。茅や粗朶を集めたり、薪やクズと呼ばれる落葉を集めたり、牛馬の飼料、季節の野草採取等生活には不可欠の場所でした。

『武蔵名勝図絵』 文政 3 年（1820 年）

八王子千人同心組頭の植田孟譜（1757・1843）による名所・旧跡が纏められた地誌書です。阿豆佐味天神社の絵図が出てきます（添付 3）

『狭山之乗』

江戸後期に杉本林志（1813・1888）によって書かれた狭山周辺の地誌書です。

多摩郡山口領村山郷岸村の項で岸清山禅昌寺と観音堂が出てきます。岸村は戸数 80 軒、石高は 321 石で、産物は緋縞（かすりじま）となっています。

『その他の特徴的なこと』

- ①臨済宗建長寺派寺院の禅昌寺は岸清山禅昌寺と号し、室町時代の正長元年（1428 年）に恵山和尚によって開山されたと伝えられています。同じく境内にある観音堂は文禄年間（1593～1596 年）の創建と伝えられています。
- ②正保二年（1645 年）阿豆佐味天神社の棟札写しに「岸」の名前が初めて出てきます。
- ③特筆すべき事項では慶長年間（1596 年～1614 年）に砂川新田（現立川市砂川町）を開いた村野家、明暦年間（1655 年～1658 年）に小川新田（現小平市小川町）を開いた小川家があります。また幕末まで名主役を務めた荒田家を含めその子孫が今でも岸に住んでいます。
- ④「岸」ではありませんが今は無くなった村があります。狭山湖（山口貯水池）に沈んだ勝楽寺村です。所沢市勝楽寺という地名が金網で囲まれた水道局用地内に今でも残っています。昭和初期に当時の東京市の上水確保の為人為的に狭山湖が作られました。住人の大半はまとまって岸の隣村三ツ木の小字桃の木に移住しています。現在も当時の様子を知る古老が数名健在です。千年村の盛衰をまじかに見てとれる所です。

参考 ①日本地名大辞典・角川書店 ②武蔵村山市史 ③絵図と写真で見る武蔵村山・武蔵村山市立歴史民俗資料館

『稲荷講』

「おいなりさん」と親しみをこめて呼ばれる稲荷講が毎年2月11日にあります。岸地区には現在8つの稲荷講が残っています。イッケを中心に行われますが、その他に地縁つながりの稲荷講もあります。宿元と呼ばれる当番がすべてを取り仕切り、宿元は毎年順番に変わっていきます。野菜やメザシ赤飯、酒を供え神主を呼んで幣束を垂らし御祓いします。終われば地元では直会（なおらい）と呼ばれる神様と一緒に会食です。昔は宿元で直会を行っていましたが、近年は近くの料理店で行っています。稲荷を祀れば家が栄えるといわれ、また商売繁盛の神として大切にしているという家がここには多くあります。

このような行事が今なお続いているのは、イッケの繋がりやお互いの健康と近況を確認し、地元の伝統を守り地域社会のコミュニケーション的な役割をはたしてきたからです。今でも岸では講を中心として地域の組合的なイッケの強い結びつきを見ることができます。本文中に添えた写真は山際の福井家と原田家合同の「福原稲荷」と呼ばれる稲荷講の様子です。

参考 武蔵村山の民俗その1 平成8年武蔵村山市史編集委員会
本文 P10 写真 岸の民俗写真「稲荷講」

『岸の屋号』（添付4）

岸には口伝による通称名と屋号が残っています。昔から山際方（ヤマギワガタ）、岸方（キシガタ）、台方（デエガタ）に分かれていました。昔から住んでいる人はわかりますが、新規住人の方は馴染みがありません。また現在この呼び方は自治会では使用されていなく全く機能していません。

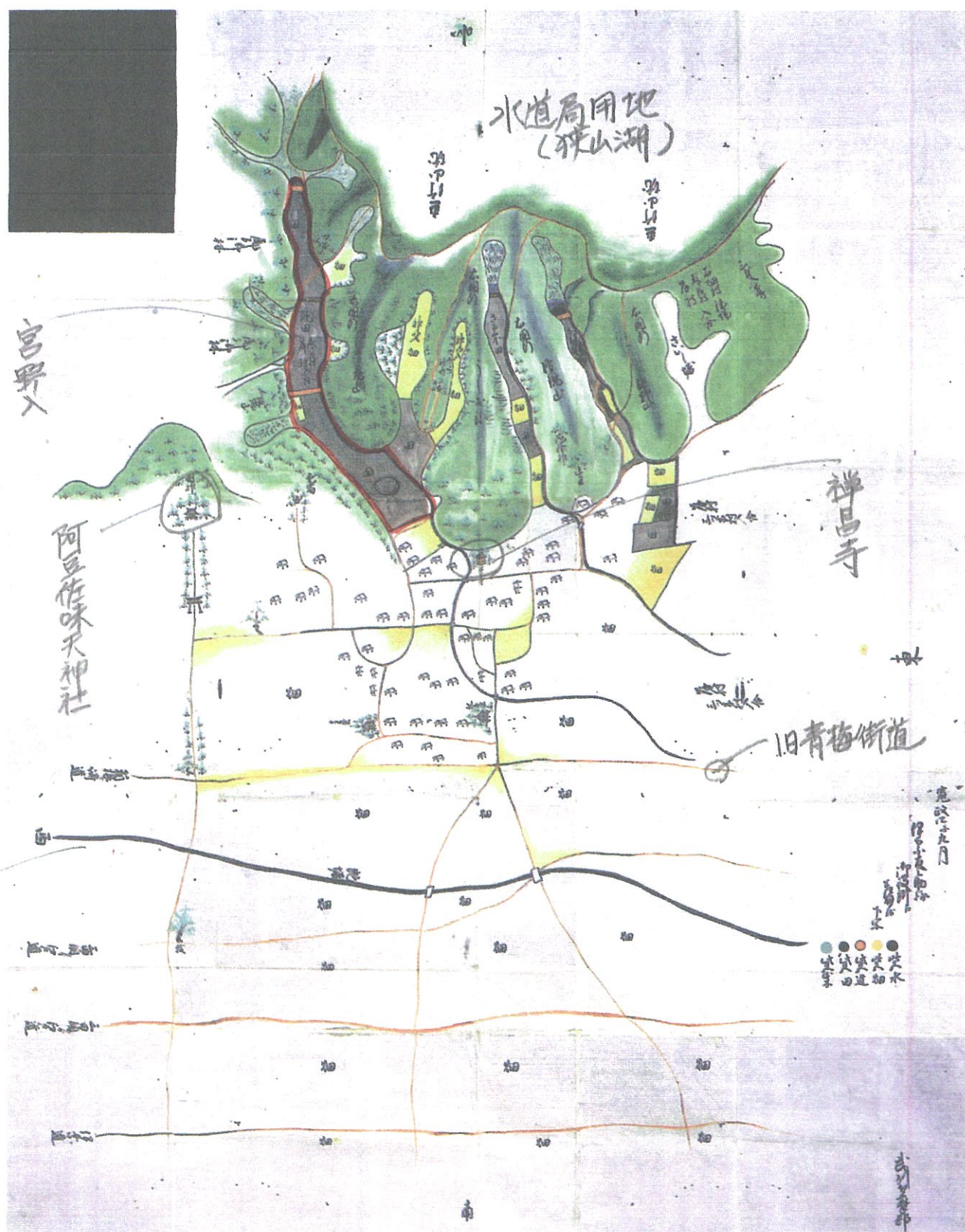
屋号は地域の人の暮らしと生産、歴史があつてこそ存在し今となつては貴重なものです。「ヤマネ(山根)」「ナカ(中)」ウラモン(裏門)」という地名や場所によるもの、「コウヤ(紺屋)」「とうふや」、タイル屋などの職業によるもの、「山際の忠さん」のように〇〇の□□さんと呼ばれ〇〇には先祖の名前や地名、□□には現在の世帯主名が入るものなどです。またそれで本家、分家を区別している所もあります。岸にはこのほかにもダルマヤ（達磨屋）、タビヤ（足袋屋）、オケヤ（桶屋）、サカンヤ（左官屋）タネヤ（種屋）などの屋号がかつてあり、農業よりも経済活動に関心が高く他村と比べて比較的自立していた地域でした。「岸屋号まっぷ」は岸の歴史と人の暮らしや、当時の人の声が聞こえてくる貴重な記録です。

参考 東洋美術学校宇留野ゼミ学生調査屋号マップ 平成20年
武蔵村山の民族その1 武蔵村山市 平成8年

終わりに

今回は千年村認証に向けて「岸」の歴史的背景に焦点を当てて調べました。かつて丘陵部は「ヤマ」、台地部は「ハラ」と呼ばれたこの台地の中で地域の歴史と文化、人々の生活が営まれてきました。現在その「ヤマ」は都立公園となったことにより、土地開発、産廃ゴミ投棄がなくなり緑が担保されました。公園内ではボランティアが活動し、来園者が里山の風景を楽しんでいます。昔からの人の営みが現在も形を変えて生産と活動の場が連綿と続いています。ここは人が繋がり輪（和）が広がる憩いの場所となりました。このことは「岸」の優れた資産です。

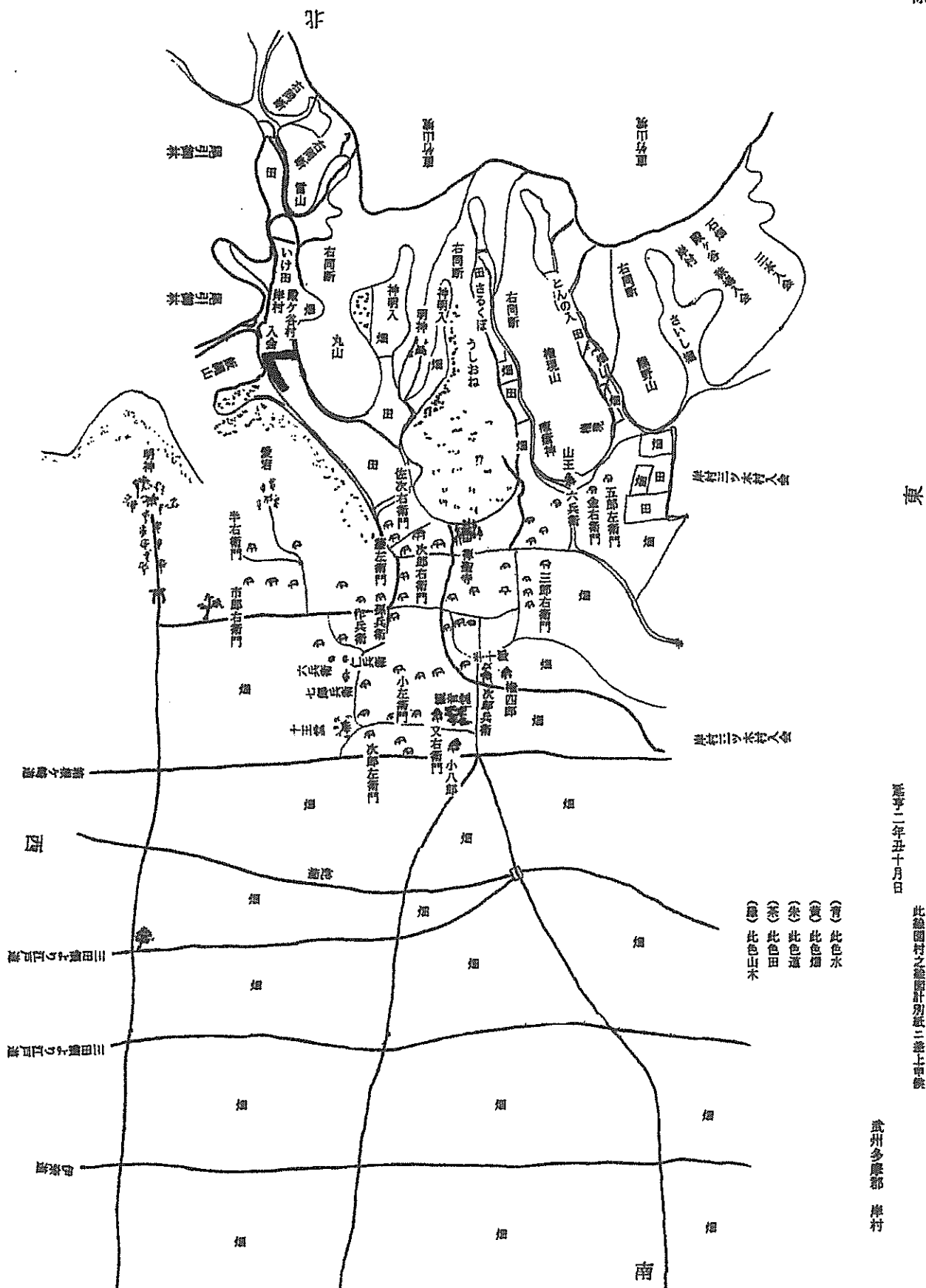
ここには向こう千年先まで続く里山の風景と人の暮らしがあります。そして千年村を契機にボランティアと地域住民が一体となって新たな街づくりが始まろうとしています。過去に学び、現在の新しい「ヤマ」と「ハラ」の関係を作ろうとしています。「岸」を千年村に推奨する理由はここに 있습니다。



第13図 岸村絵図<寛政4年 (1792) 9月、荒田家文書>

平成29年度特別展解説書「絵図と写真で見る武蔵村山」より

平成29年10月発行 武蔵村山教育委員会(歴史民俗資料館)



第 14 図 岸村絵図 (第 13 図) 模式図

武蔵名勝図会

阿豆佐美天神社

